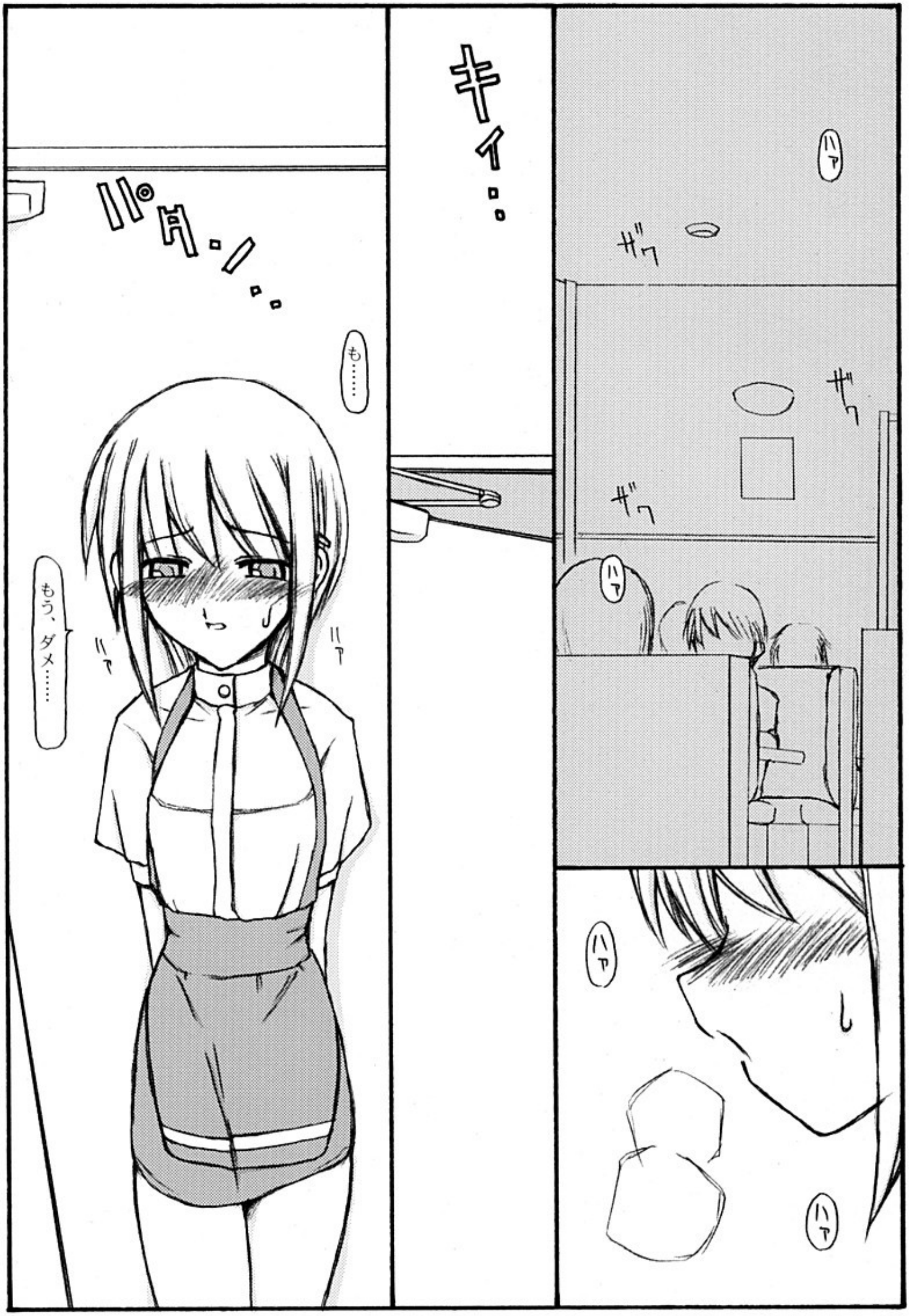
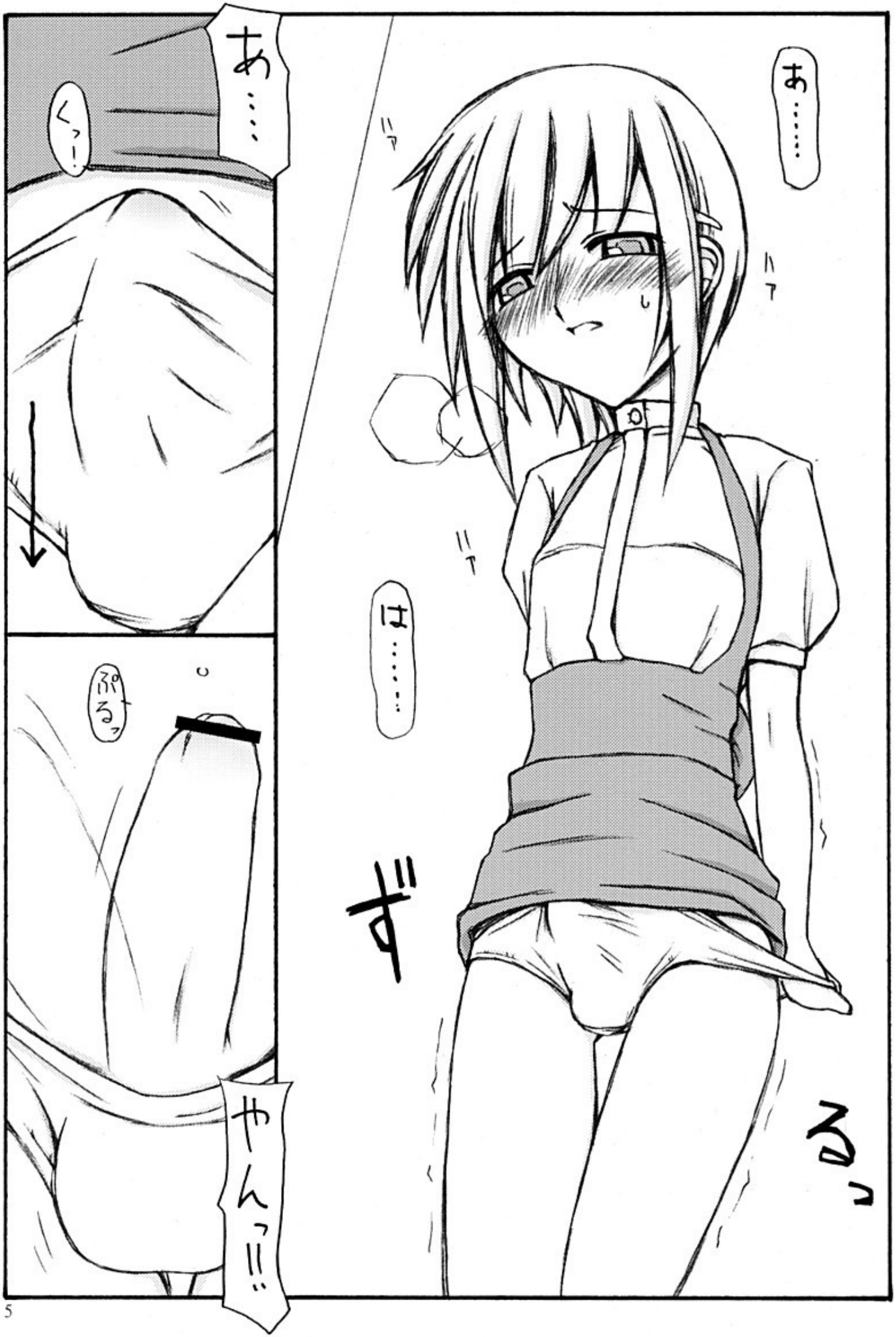
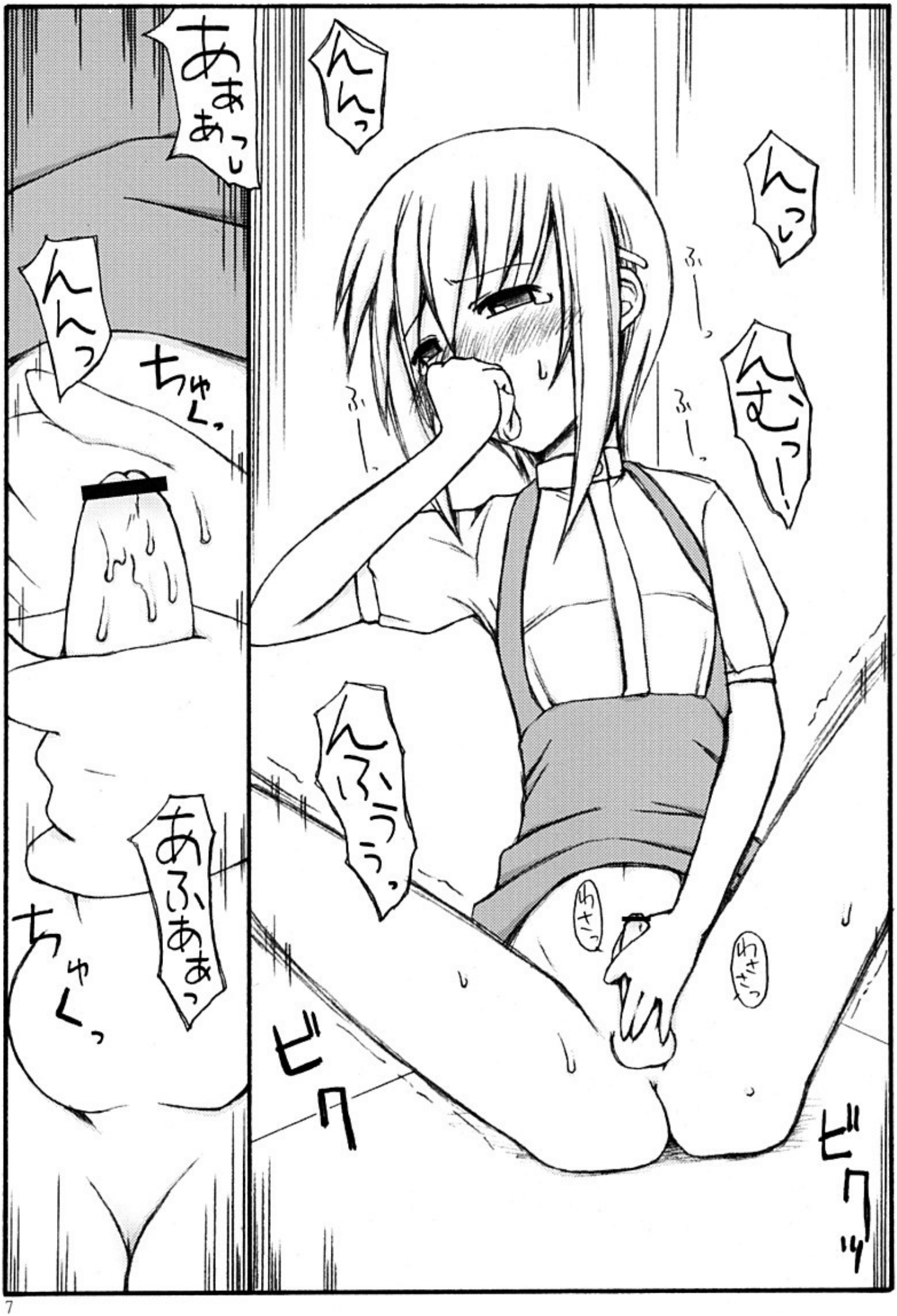
ピースフル


ハァ
ガク
ハァ
キィ…。
ハァ
し
ハァ
パタ…ン…。
も……
もう、ダメ……
ハァ
ハァ

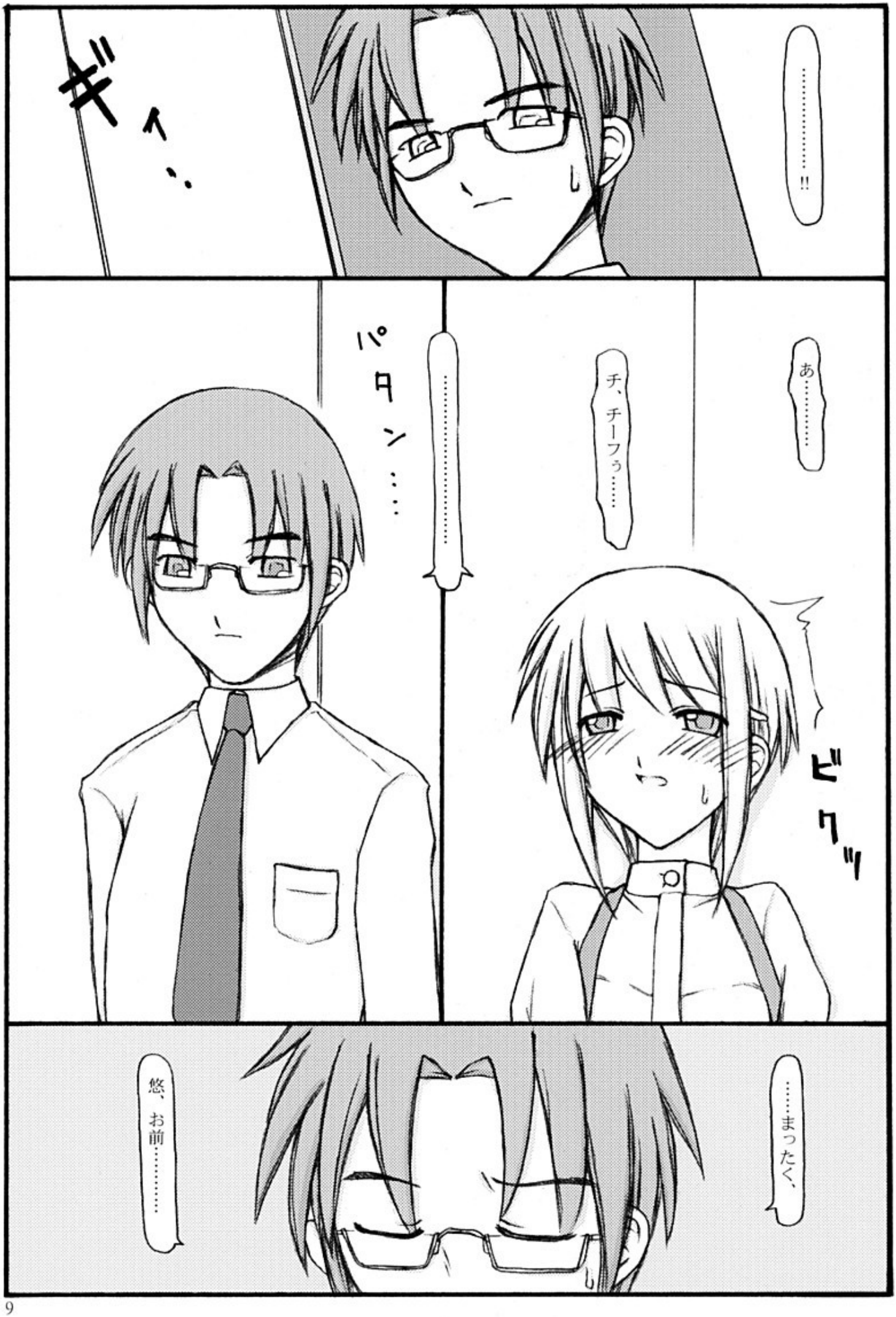
ムネとか……
ないから？
お尻とか……
こんなに視線が、
きゅっ
刺さるなんて……


あ……
ハァ
ハァ
は……
ぎゅ
ぷるっ
やんっ!!!
あ……
くっ!

あ……
はぁぁ……
すー
ろ、、、
ああ……これ……
男の子の匂い……
あたし、女の子なのに、
こんなにオスの
匂いさせてる……
ふっ
ふっ
ふっ
ぴくんっ
ぴくんっ
きゃんっ
ぶるっ


んんっ
んっ
んむっ！
ふーっ
ふーっ
んんっ
ちゅくっ
あぁあっ
んんっ
ふうっ
ちさっ
ちさっ
ビク
ビク
あふあぁっ
ちゅくっ

ビクッ
ビクッ
!!!
ビクッ
びゃ
びゃ
びゃー
びくっ
びくっ


……!!
ギィ、
あ……
チ、チーフぅ……
……
パタン……
ビクッ
……まったく、
悠、お前……

「そう。そこに立って。……そう。じゃあ、一回りしてみてください。ゆっくり。」

店の喧噪をよそに、このオフィスは静かで、わずかな備品の一つである机も、グレーのスチール製で味気なかった。

ほとんど赤に近い、ピンクのエプロンと、それとは対照的な藍色の髪の毛が揺れた。エプロンと同じ色のリボンで絞られた袖口、そこから伸びる細い腕、ぴったりした短いスカートの所為で強調された腰の細さと、そこからスラリと伸びる足。それらが一つ一つ、ゆっくりと目に飛び込んでくる。向き直った視線は伏せがちで、どことなく落ち着きがなかった。

採用の判断を受けるためにここを訪れた子は、大抵その様な表情を浮かべるものだった。だが、今、目の前にいるこの少女は、何かまた別の不安を抱えているように見えた。

少女の一連の動作をじっと見つめていた鳴瀬は、静かにため息をつくと、手元に有る履歴書を手に取り、目を通すフリをしながら口を開けた。

「『高見　悠』さん。」

「……はい。」

かすれて、消え入りそうな声で返事をした。

「残念ですが、この店で働くには、まず、その制服が着こなせなければはじまりません。自分でもお気づきかもしれませんが……わかりますね？」

そう言うと、顔を上げ悠の顔をのぞき込むように見た。少女は目が合うと、怯えるように目を細め、その薄い胸を隠すように自分の肩を抱いた。本来ならば、その制服を着た者の膨らみを納め、それを誇張する様に作られた胸の部分は、その少女の場合、不格好にしわを寄せているだけだった。

その様子を見た鳴瀬は薄く笑いながら言った。

「そうですね。理解が早い。でも、……違うよ。私が今言っているのは『その』ことじゃない。」

言いながら立ち上がる。

「『高見　悠』……君の父親は、あの舞台俳優の高見沢　誠二だね？」

その名前に少女はピクッと反応する。

「ち、違……」

その言葉を切って続ける。

「私の実家が彼の自宅の近所でね……彼には子供は男の子一人しか居ない。……ねえ悠司君。」

その名前を告げられた悠という少女……いや、悠司という少年は、動揺を隠せなかった。

「いや……ち、違い……ます……」

そう言いながらも顔面はみるみる蒼白になる。

「雇われるかどうかは別として、本気でバレないとでも思っていたのか？」

「……」

「こっちを見ろ。」

今度は否定もせず押し黙ってしまった少年に、鳴瀬は少し苛立ったような声を上げて見せた。その声に少年は鳴瀬を見上げる。

「別にこのことで君をどうこうしようという訳じゃない。君はバイトの面接に来て、不採用になった……それだけだ。」

悠司の顔から、少し動揺が引いた様だった。

「だが……さっき私が君の制服姿をチェックした時……」

鳴瀬は言いながら悠司のすぐ前に立つと、囁くように言った。

「感じていたろう？」

少年は再び、ハッと鳴瀬を見上げたが、目が合うと蒼白だった顔がみるみる紅潮し、すぐに目をそらせた。↖

↘「そ……そんなこと……ありません……。」
「じゃあ、見せてみろ。」
「……え……！？」
「女装姿をじろじろ見られて感じてるような変態少年なら、いくらでも話の種になる。そうじゃないと言うなら、自分でスカートめくって、その下がどうなっているか、見せてみろ。」
「……う……」
　唇をかんで呻く。
「男同士なんだ。大したことじゃないだろう？」
「……はい。見せます。見せますから……この事は誰にも言わないでください。」
「……よし。いいだろう。」
　少年は、スカートに手をかけると、ぴったりと肌にフィットした布を少しずつ上にずらし始めた。
「……ん……ふ……」
　時折甘い声を漏らしながらも、いつしかスカートの下の白く小さな生地が顔を出した。
「下着まで女物か……ずいぶん堂に入ってるじゃないか。」
「……いやぁ……。」
　シンプルなショーツは、普通なら有るべきでない物体に押し上げられ、奇妙な膨らみを作っていた。
「やっぱり堅くなってるじゃあないか。そんな小さな布じゃあ収まりきらないだろう……？」
「こ、これは、スカート上げるときに擦れて……！」
「どうかな？　それより、どうだ……？　今もどんどん大きくなってるぞ？」
　大きくなるにつれ堅さを増し、その所為でショーツの生地と腹の間を擦れる感覚にさらに大きくなる。その快感の悪循環に少年の腰が引け、カクンと膝が折れ床に着く。
「あ！……は……いやぁ……だ、ダメ……治まらない……！」
「くく……やはり君は見られて感じるんだな。」
「きゃう……！」
　跪いた悠司の股間を、鳴瀬は脛で触れる。スラックスの上からでも、少年の物が熱くなっていることが分かった。
「認めてしまえ……そうすればもっと気持ちよくしてやる。」
　悠司の腰の動きに合わせるように、強すぎず、弱すぎず、微妙な刺激を加えてやる。
「……あふっ……う……」
　その行為に目は潤み、湿った視線を鳴瀬に投げた。そして観念したように同じように湿った唇を開いた。
「……う……そうです……鳴瀬さんに、頭のてっぺんから足先まで見られたとき……感じ、て、ました……。お店でもっとたくさんのヒトに腰とかお尻とか見られる所を想像したら……胸の奥がキュンとなって……お……おチンチンが堅くなりかかってたんです……。」
「ふふ……よく言えた。」
　鳴瀬は悠司の頬にかかった髪の毛を、指先で優しく払いのけた。
「あン……」
「それじゃあ……約束通り気持ちよくしてやるよ……。」
「はい……う、嬉しいです……。」

http://ssdzk.kubiwa.net/misc/anmila.html

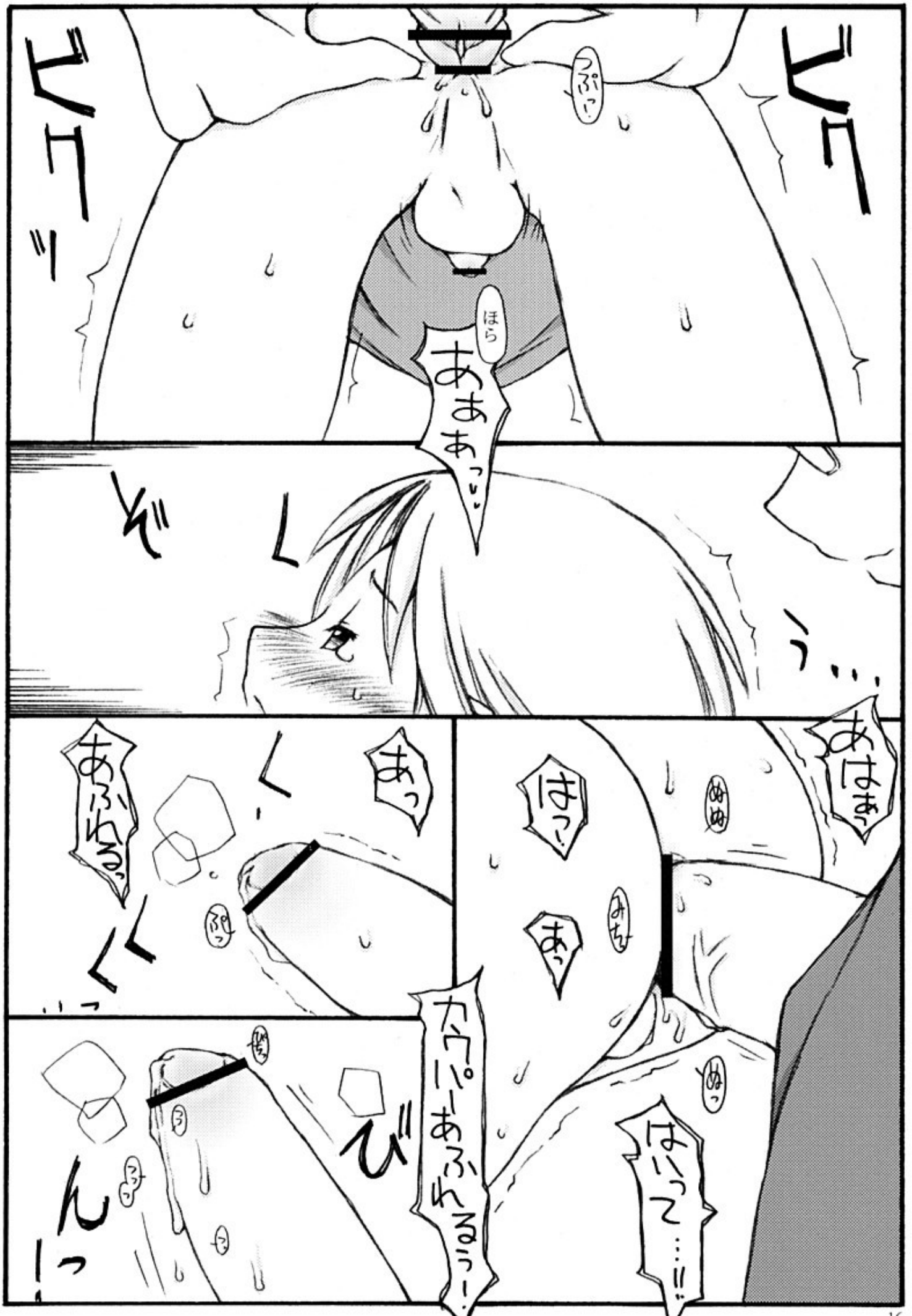
本編の２人の初出です。制服はピンクで、悠も髪の色を抜いてなかったみたいです。元々はこんな感じでしたが、今ではまんがの通りです。悠はちゃんと働いているみたいだし、はまってしまったのは結局どっちなのか、描いた自分でもよくわからない２人です。……では、後半をどうぞ。

何やってんだよ！
す、すみませんっ
ガ、ガマンできなくて…
ガマンできなくなったら、俺を呼べって言ったろ？
ほら！

ああ……チーフの、お、
おちんちん……
ハァハァ
ズルル…
すごい匂いですぅ……
トロン…
え……舐めると匂いが消えちゃうって、……気づいたんです。
……どうして舐めないんだよ……
……ったく、変態がっ……！
プイ
ピチャピチャ
あぁっ!!

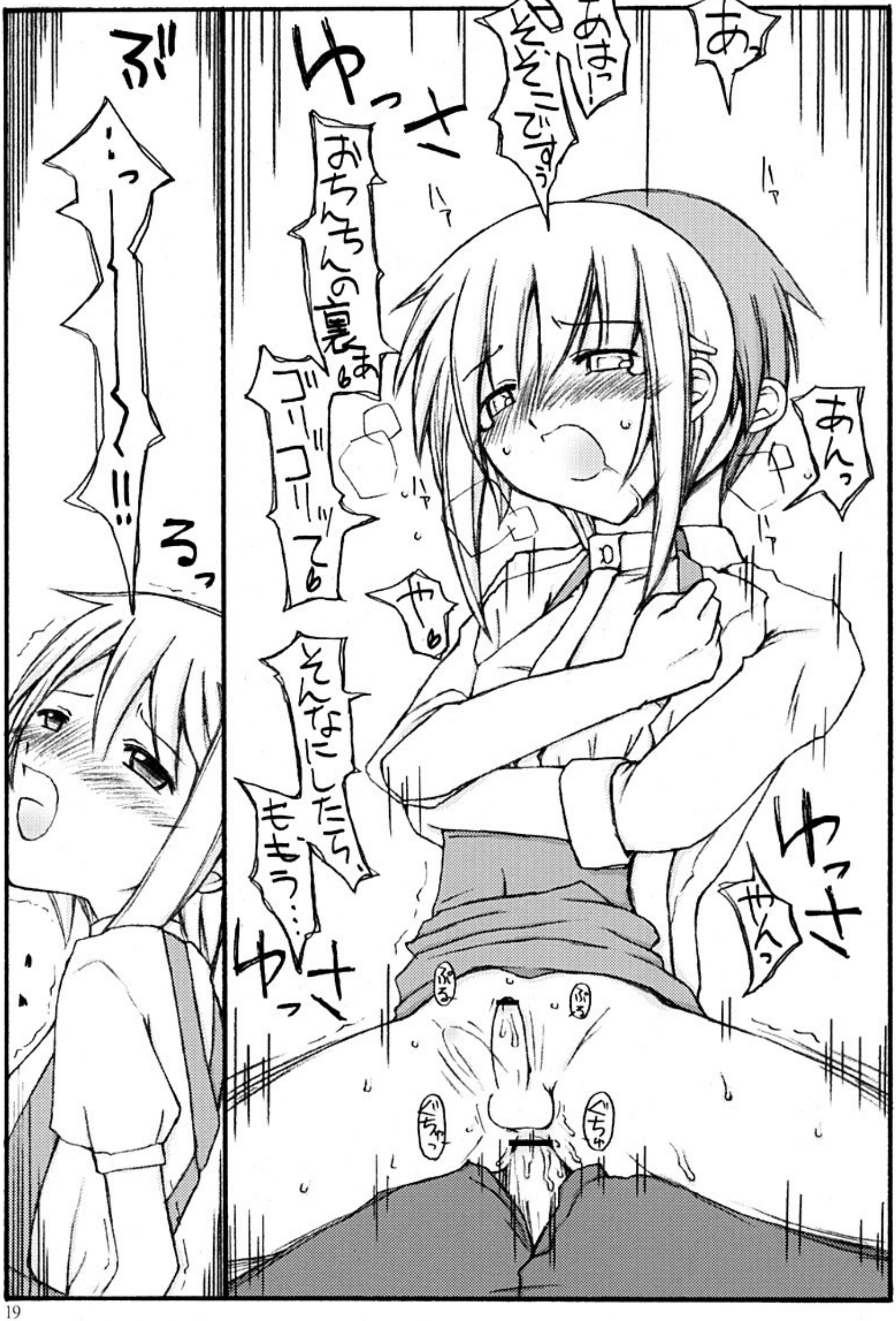
あぁ……!!
すごぉい……
ヌルヌルぅ……
ハァ
ハァ
ヌルッ
ヌルッ
……くっ!
ビクッ!!
あっ
あはっ!
せっ
せーえきっ
ビクッ!!
びゅっ
びゅっ

あ、あたし……もう…
ガマンできません……
お尻の内側、ジンジンきちゃって…
チーフのを……は、早くぅ……
ひくっ
ひくっ
ひくっ
チーフのおちんちん下さい……!!
くくっ、まるで女だな…前立腺が切ないのか……


ゴソゴソ
ぷぃ
ほら
あああっ
ぞくぞく
あはぁ
ぬぬ
はっ
あっ
みち
ぬっ
はいって…!!
かぷーあふれるぅ!
びくん!
あっ
ぷっ
あふれるぅ

ほうら、
あっ…あっあぁ～…
ふ!!
全部入った……
ろっ…
きちっ
ぢっ
あぁ……
これが欲しかったんだろ?
はひ…すごいっぱい……

うぁぁ…抜く時い…
ずるる
ぷにっ
ぷにっ
う
抜く時凄……っ!!
ずずっ
ん
あっ
あぁっ
がくっ
がくっ
はあっ
あんっ
ずぬっ
ぬっ
あぁっ
ぬっ
やはあ
ぷるっ
ぷるっ
ぢゃぷっ
ぢゃっ
あっ
じゃ、トドメだ……
キッチっ
ぐ
っ


あっ
あはっ！そこ…だめぇ
ゆっくり
おちんちんの裏ばっかゴーリゴーリてる
あんっ
やっ
そんなにしたら、もう…
ゆっくり
ぷるっ
ぶるっ
ぶちゅっ
ぶちゅっ
ぶ…っ!!!
ろっ

ぶるっ
ぶるっ!!
びくっ!!
びくっ!!
びくっ!!
あ〜〜あぁ!!!
どくっ
どくどくっ
ぴゅっ
ぴゅっ
ぴゅっ
ずるっ
ぶるっ
あはぁ
ぶるっ
ぴゅっ
どろ
あぁ…

き、きもちよかったですぅ……

ピースフル

企画 制作
リウヰチ（砂々塚）

印刷 製本
サンライズパブリケーション株式会社 様

「砂々塚」ウェブサイト
http://www3.to/ssdzk/ or http://ssdzk.kubiwa.net/

この同人誌の内容はフィクションであり、実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

by 砂々塚（ササヅカ）
http://www3.to/ssdzk/
－成年向け同人誌－